

想像力と創造力英語の詩作活動への取り組みについて：より良い英詩理解のために

著者	丹羽 佐紀
雑誌名	鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要
巻	24
ページ	97-102
発行年	2015
別言語のタイトル	Imagination and creativity: introduction of writing poems in English for a better understanding of English poetry
URL	http://hdl.handle.net/10232/23048

想像力と創造力 英語の詩作活動への取り組みについて

—より良い英詩理解のために—

丹羽 佐紀 [鹿児島大学教育学部 (英語教育)]

Imagination and creativity: Introduction of writing poems in English for a better understanding of English poetry

NIWA Saki

キーワード：詩、表現、情景、音、感性

はじめに

英国文学講読の授業で、詩の解釈と鑑賞に加え、学生が自分たちでそれぞれ英語の詩を作るという活動を取り入れている。近年、小学校から高校までを通じて、英語の授業において文学作品を取り上げること自体が敬遠されつつあり、小説、ましてや英語の詩に触れる機会は、ほとんど無い。このような状況を経て、大学で詩の講読の授業に臨むと、戸惑いを覚える学生も多い。しかしながら、もともと様々な事象が大量の文字を通じて伝達される以前、いわゆる口承文学と呼ばれる一連の韻文作品の形式は、他者への「語り」の最も自然な形であったのであり、音と一定のリズムを有することによって、聴く者の記憶の底に潜在的に残り続けるという特色を持っていた。その心地よさを少しでも引き出すために、授業では、著名な詩に向き合い、その解釈に思いを馳せて自分の体験と重ね合わせるだけでなく、そこからさらに自分の言葉として発信し直すという取り組みをしている。強い感情の表出は、時に凝縮された言葉によってこそ、より鮮明になる。また、そのために自分の言葉を模索する行為は、他者の詩作品を巡る歴史的状况、詩人の生きた時代と風土が育んだ価値観、そして英語そのものの響きを持つ魅力など、多岐にわたる異文化理解への礎になると、授業を通して実感している。

そこで本論では、自分自身の体験を題材にして、実際に英語の詩を作るという活動の具体的状況と効果を示し、英詩の解釈と鑑賞に限った場合との違いを明らかにしたい。それによって、英詩の魅力や意義に触れるために今後何が出来るのかを改

めて考えてみたい。詩を他者の作品として機械的に「読む」のではなく、その表現技法を模倣し、自らの体験として「詠み」直す作業は、結果的には自分自身を見つめ直すことにもつながると考える。

I 情景を詠む

(1) 詩の背景を知ること —自らの詩作活動の動機づけとして—

あるひとつの詩で、自然の情景あるいは詩人を取り巻く周囲の景観の様子が描写されている時、読み手がそのまま詩人の見ている情景への感動を共有することは、俄かには難しい。そこで授業では、可能な範囲において、その地方の情景の映像資料を取り寄せ、視覚的印象を擬似体験できるよう心がけている。例えば、ウィリアム・ワーズワース (William Wordsworth, 1770-1850) の “Lines Written above Tintern Abbey” では、日本で身近に廃墟の修道院を見ることは困難なため、詩人が詠んだ修道院跡の写真を配布したり、最近ではインターネットを通じて各自が検索できる環境が整いつつあるので、授業中に確認してもらうなどの時間を設ける。“Salisbury Plain” や “Composed Upon Westminster Bridge” といった詩であれば、DVD などの資料も豊富である。ただし映像資料は、場合によってはイメージが固定化され、想像力の広がりを遮ってしまう場合もあるため、例えばある特定の人物描写が、内容的には人間の普遍的な性質に関わる解釈を読み手あるいは聴き手に求めるものである場合、多用を避けるべく注意する必要がある。ただ、イギリス湖水地方の丘や湖、ジョン・キーツ (John Keats, 1795-1821) が小夜啼き鳥を詠んだハムステッ

ドの庭など、自分たちの身近にも似たような風景をイメージとして思い描けそうな映像を視覚的に確認すると、時代や風土の違いを超えて、詩そのものに対する親しみの感覚を持ちやすいようである。

(2) 自分の心に残っている情景を詩に詠む

誰でも多かれ少なかれ、自分がこれまで育った、あるいは訪れた場所で、特に強く心に残っている情景というものがある。その情景をそれぞれ英語で詩に詠んでもらうために、授業ではまず、それがどのような時の、どのような場面であったかを改めて明確にするよう学生に促す。次に、内容を日本語で皆に紹介してもらおうが、それは情景説明であると同時に、自分にとってどのような意味を持つ情景であったのかを各自が再認識する手助けとなる。言葉を選びながら、その場面を客観的に分析し説明することで、記憶の細部から重要な部分が引き出され、表現すべきキーワードを浮かび上がらせることが可能なのである。

次にその作業を、(1)で詩人の情景に寄り添った体験と重ね合わせ、「自分であれば、印象に残った情景をどのような英語で表現するか」という創意工夫につなげていく。授業で扱った英詩に使われる単語やイデオムを参考にしながら、自分なりにふさわしい言葉を探していく。日本語と違って、微妙なニュアンスの違いや適性を探っていく作業は、少々時間はかかるが同時に発見の楽しさもある。母国語ではないからこそ、自分の感覚にぴったりと合う表現が見つかった時は、喜びもひとしおである。実際に学生に詩を作ってもらおうと、旅先などよりも故郷の風景をテーマに選ぶケースが圧倒的に多い。

(3) 読み手・聴き手と共有できる情景をテーマとして

以上のような、個々の思い描く情景を詩に詠むための作業には比較的時間を要するため、推敲を必要とする学生には随時、次の授業時までの課題として提示する。授業時は、それとは別にもう一つ、比較的受講生の間で共有しやすい見慣れた情景をこちらからテーマとして指定し、英語の詩を作ってもらおう。「桜島」「錦江湾」「キャンパス」など

といった例が挙げられるが、形式にはこだわらない。時間的な制約もあるため、英語で数行程度の短い自由詩を作ってもらおう。

情景に対するイメージや経験が、ある程度共通している場合、使用する単語も重なることが多いのが特徴である。例えば桜島は、男性性や男らしさ (masculinity) のイメージで捉えられることが多く、噴火している時は機嫌が悪い状態 (“bad mood”, “bad humor”) と描写される、などの例が挙げられる。また、私たちを見守ってくれる、慰めてくれるといった擬人化 (personification) の用法もよく見られる。表現の近似性は、語彙力の限界として否定的に捉えるのではなく、自分たちが対象の事物に対して感覚を共有できること、感動を分かち合える可能性の証として、肯定的に受けとめたい。他者の表現を容易に理解することが出来れば、自分で表現してみようと思うきっかけにもなり得るからである。

II 感情を詠む

(1) 恋愛を詠む 一直喩からメタファーまで一

経験に基づいた情景を詩に詠む時には、個人の経験はそれぞれ異なるので、言葉に表現した事の細部を、他者に即座に理解してもらうことは困難である。しかし、出会いや別離といった、人と人との関わりの中でそれぞれが相手に抱く感情を詠むことは、各場面や時代は異なっているとしても、想いを共有しやすい普遍的な題材として詩作に向いていると言える。その中でも、恋愛をテーマとした詩は、時代を超えて共感を呼びやすいようである。

恋愛詩は、文学史上においてはかなり初期の時代の作品であっても、現代の学生にとって抵抗なく読め、宗教詩などと比べて詩人の心情が理解しやすいものが多い。例えば、作者不詳のバラッドは、語りの素朴さが恋する者の気持ちの理解を容易にし、直接的な表現ゆえに強く聴く者に訴えかける魅力を持つ。そうかと思えば、ジョン・ダン (John Donne, 1572-1631) の奇想 (conceit) に富んだ恋愛詩を授業で読むと、片想いや失恋の苦悩、両想いの喜びが様々なメタファーに彩られて展開されるため、その意外性に逆に惹きつけられる学生も多い。例えば、有名な “The Flea” では、「蚤は

先ず僕の血を吸い、今度は君の血を吸う。・・・ここで僕等は結婚した。いや、それ以上と言える) (“Me it sucked first, and now sucks thee, / . . . Where we almost, nay more than married are.”) という表現に多くの学生が驚きを隠さないし、“A Vaediction: of Weeping” における「僕の涙は、君の顔が鑄造するもの、君が印を打つ。君は造幣局、僕の涙に多少なりとも価値を与える。何故ならば、僕の涙は、君の肖像を孕んでいる。」 (“For thy face coins them, and thy stamp they bear, / And by this mintage they are something worth, / For thus they be / Pregnant of thee;”) という、涙の鑄造の比喩も、なかなか通常では結びつけて考えにくい、それ故に読む者の記憶に残りやすい。¹⁾

このように古から現代までの恋愛詩を詠み、その表現技法の多様性に触れたあと、今度は自分たちで作ってみようと学生に働きかける。その際、いきなり漠然と恋愛について長い詩を詠もうとするのではなく、最初は言葉遊びや連想ゲームのような感覚で短い文を作ることから始めると、少しずつその言葉を長くしていくことができる。実際の授業では、例えばシェイクスピア (William Shakespeare, 1564-1616) の *Romeo and Juliet* (1594) に出てくるロミオの台詞「恋とは溜息の雲とともに立ちのぼる煙だ」 (“Love is a smoke made with the fume of sighs” (1.1.181)) という暗喩 (metaphor) をヒントに、自分たちで “Love is ○○” にあてはまる言葉を考えてみる。「恋人にあう心は下校する生徒のようにうきうきし」 (“Love goes toward love as schoolboys from their books” (2.2.156)) といった直喩 (simile) を同じように自分たちで作ってみる、などの作業を取り入れる。²⁾ 思いついた文を互いに紹介し合うと、結構盛り上がることもある。このように、片思いや失恋といった恋愛にまつわる様々な感情を英語で詩に詠むことを、身近な行為として捉え直すことで、より長い詩を作る動機づけとすることが出来る。

(2) 超自然的世界、幻想的世界 — 詩の世界に入ること —

英詩を読み進めていく中で、学生が特に解釈に難解さを感じたり、戸惑いを示すのは、宗教も含

めて広く超自然的または形而上的な世界を詠んだ作品に向き合う時である。宗教詩については、イギリスの文学作品を読むにあたっては、いつの時代の小説や詩であっても、何らかの形でキリスト教的な背景との関わりを考慮せざるを得ないので、歴史的な出来事を地道に確認し、勉強しながら解釈を進めていくことが必要不可欠である。中世からルネサンス、王政復古以後帝国主義時代に至るまで、ひと口にキリスト教といっても様々な政治的・思想的変遷があり、文学作品もそのような流れに大きな影響を受けてきた。詩人の信仰生活の内面にまで入り込むことは出来なくても、歴史を学ぶことで、詩人の置かれた立場をその詩に読みとることは可能であろう。

では、ウィリアム・ブレイク (William Blake, 1757-1827) の幻視・幻聴に基づいた詩に見られるように、詩人の独創的な世界を詠んだ詩に対しては、どのように取り組むか。この場合、ロマン派の詩人サミュエル・テイラー・コールリッジ (Samuel Taylor Coleridge, 1772-1834) が *Biographia Literaria* (1817) で提唱した「不信の休止」 (suspension of disbelief) という姿勢が、現代においても重要なのではないか。すなわち詩を読む際、その詩の世界を完全なものにするために、読み手は「その言葉に対する不信の念を自ら進んで停止させる」ことが必要だとする考えである。³⁾ コールリッジは、次のように述べている。

In this idea originated the plan of the LYRICAL BALLADS; in which it was agreed, that my endeavors should be directed to persons and characters supernatural, or at least romantic; yet so as to transfer from our inward nature a human interest and a semblance of truth sufficient to procure for these shadows of imagination that willing suspension of disbelief for the moment, which constitutes poetic faith.⁴⁾

自ら意識して詩的世界を作り出すという知的作業は、おそらく目の前にある日常世界の出来事に囚われがちな現代においては、想像力を養う上で重要なことだと言える。

現時点で、意図して超自然的・幻想的世界を英語で「詠む」という取り組みにはまだ至っていない。おそらくこのような世界を想定すること自体、かなり努力と工夫を要するであろう。ただ、ニュアンスとしては少々異なるかもしれないが、テーマとして、例えば今までに自分が見た夢の中で少し風変わりであったり非現実的だったものを思い出し、簡単に英語で綴ってみるといった提示の仕方をすれば、学生にとってもある程度自分の経験として表現することが可能であろう。

Ⅲ 音を楽しむ

(1) 詩を朗読することの大切さ —リズムおよび響きの美しさを知るために—

文学の歴史は、韻文の形から始まる。韻文においては、小説のような散文と違い、内容だけでなく「音」という要素が、聴き手もしくは受けとめる側に重要な影響を与える。イギリス文学史上においても、数々の古代英雄譚や武勇物語は、韻文の形で語り継がれ、そのリズムや音の響きによって、内容の荘厳さや格調高さに輝きが増した。印刷技術が発達し、やがて文字を通して人々が様々な作品に大量に触れるようになり、さらに18世紀以降散文が台頭してきた後も、詩が持つ「音」の効果は忘れられることなく受け継がれてきた。イギリスにおいて、桂冠詩人といった称号が今なお維持されているのも、そのような人々の詩に対する思いを表すものであろう。

以上のことからわかるように、詩を詠むとはすなわち、「音」の響きを意識するということでもある。したがって、授業の中で英語の詩を詠むという作業を取り入れる時には、必ず作った詩を学生自身に朗読してもらうことにしている。自分の感情を表出させたものを、他者(すなわち詩を聴く人)にアウトプットしたり、聴き手が目の前にいる状況で、直接自分の思いを言葉として表現することに抵抗や恥ずかしさを感じる学生も、若干いる。顔を見て話さなくても様々な手段でコミュニケーションが取れるようになった現代においては、このようなやりとりは学生にとって、戸惑いを感じさせる慣れない行為であるのかもしれない。そこで、学生が朗読した後には、必ず他の学生に、

聴いて感じたこと、共感できたことなど何らかのコメントをするよう求めている。すると、詩を朗読した学生も、自分の詩に対して友人たちがどのような受けとめ方をしてくれたのかわかり、表現することの意義深さと喜びを同時に味わい、また徐々に積極的に朗読するようにもなる。このような相互のやりとりは、単に本人が文字にした紙媒体のものを皆で読み回すだけの作業とは、明らかに違う効果をもたらすものである。

(2) 韻を踏む —英語の音の響きを楽しみながら—

「音」を意識して英語の詩を詠む時、まずは、授業で扱う多くの名詩に使われている、脚韻 (rhyme) を取り入れて短い詩を作ってもらおう。二行連句 (couplet) から始めると、比較的作りやすい。さらに、もう少し知恵を絞って頭韻 (alliteration)、中間韻 (internal rhyme) を試みると、英語の「音」の響きが持つ面白さに気がつく。上手いかわない時は、不完全韻 (imperfect rhyme) になっても構わないし、逆に続けられそうな時は、例えば十四行詩 (sonnet) のように奇数行と偶数行で交互に韻を踏ませたり、男性韻 (masculine rhyme) や女性韻 (feminine rhyme) に挑戦することも出来る。

工夫が必要なのは、脚韻を意識するあまり、詩の内容の流れが不自然になったり、意味が不明にならないように各行をつなげていくという点である。しかし、綺麗に脚韻が踏める単語はないか、などと言葉をあれこれ探していく作業そのものに発見の面白さがあるとも言えるので、可能な限りそういった時間を大切にすることが理想的である。

(3) 言語遊戯

ルイス・キャロル (Lewis Carroll, 1832-1898) やエドワード・リア (Edward Lear, 1812-1888) に代表されるナンセンス文学は、作者が自由自在に言葉を操り、言語に対する既成の概念や常識を覆したという点で、文学史上において特異な出来事として位置づけられている。それは一方で、読み手に多大な解釈上の困難をもたらすという可能性も孕んでいたが、言語の戯画化によって醸し出されるラビリンスの世界は、それだけで言葉自体の

魔力を読者に気づかせるに十分であった。

よく知られているキャロルの『不思議の国のアリス』(*Alice's Adventures in Wonderland*, 1865) や『鏡の国のアリス』(*Through the Looking-Glass*, 1871)では、字謎もしくは語句の綴り換え(anagram)、沓冠詩(acrostic)、鏡文字(mirror writing)、わけのわからない言葉(jabberwocky)など、奇想天外な言語遊戯の場面が次々と展開される。キャロルは、もともとオクスフォード大学の数学の教師であり、言葉を幾何学的に捉えることを得意としたとされるが、その意味で彼の作品においては、登場人物たちよりもむしろ言葉そのものが、物語の主演となっていると言ってもよいであろう。

授業で、これらの言語遊戯を試みることを学生に提案すると、即座に模倣するのは難しいという印象を最初は持つようである。しかし実際に作り始めてみると、例えば“cloud”という単語をひとつ決めておいて、各行の頭にそれぞれ“c-l-o-u-d”の文字が来るようにしながら雲に関する詩を考えるなど、パズルのような感覚で言葉探しを楽しむことが出来る。そしてやはりこの場合も、自分が作った詩を無言で紙に書いて提出してもらうのではなく、他の人に対し、朗読して聞かせるということを実践してもらう。自ら声に出して、他者に向けて語ることによって初めて、詩はその人自身の一部になるのだ。

終わりに

以上述べてきたように、詩という、日常生活の中ではまだ特殊なジャンルと思われがちな言語表現の一つのスタイルを、あえて英国文学講読の授業の中で実践的な形で取り入れることにより、結果的には名詩とされる多くの作品の「読み」や「解釈」に役立っていると考える。テキストを眺めて文字を追っているだけでは、勉強しているという感覚だけが働いてしまい、詩の本当の面白さを実感してもらいにくい。また文学史上においては、数えきれないほどの名詩が存在するため、それら全てを時代ごとに逐一鑑賞していく時間は取りにくい。だが自分で詩を作ることは、教室での授業という限られた時間や空間でなくても可能である。一つの言葉の意味を自分で捉え直し、自分にとっ

て最もふさわしいと感じられる場でその言葉を使う。そのようにして創り上げた詩を他の人に詠み聞かせることで、感性への共感が得られれば、講読の授業で詩を取り上げる「文学」的意義は果たせたとと言える。

英語を、勉強科目ではなくコミュニケーションのツールとして捉える、ということがよく言われる。言語習得のために実践を重視する昨今の傾向にあつては、そのような認識が確かに必要かもしれない。しかし、それを認めた上で、さらにその先にあるもの、すなわち言葉そのものに内在し、それを語る—あるいは詠む—者によって生命を吹き込まれ、我々の感性に働きかけるより本質的な「何か」を求める姿勢も、とりわけ文学の授業では大切にしたいものである。そしてそのような取り組みのために、詩は最適な環境を与えてくれると言える。

註)

- (1) 原文テキストについては、John Donne, *The Complete English Poems*, ed. A. J. Smith (Harmondsworth: Penguin Education, 1973) を用いた。また、本文中の日本語訳は、湯浅信之訳『ジョン・ダン全詩集』(名古屋大学出版会、1996年)を用いた。
- (2) 原文テキストについては、William Shakespeare, *Romeo and Juliet*, ed. G. Blakemore Evans (Cambridge: CUP, 2003) を用いた。また、本文中の日本語訳は、小田島雄志訳『ロミオとジュリエット』(白水社、2009年)を用いた。
- (3) 福原麟太郎・吉田正俊編『文学要語辞典』(研究社、1978年) 279頁 (“suspension of disbelief”の項) を参照。
- (4) Samuel Taylor Coleridge, *The Complete Works of Samuel Taylor Coleridge*, ed. W. G. T. Shedd, Vol. III (Kyoto: Rinsen Book Co., 1989) 365.

参考文献

- Donne, John. *The Complete English Poems*. Ed. A. J. Smith. Harmondsworth: Penguin Education, 1973.
- Coleridge, Samuel Taylor. *The Complete Works of Samuel Taylor Coleridge*. Ed. W. G. T. Shedd. Vol. III. Kyoto: Rinsen Book Co., 1989.

Shakespeare, William. *Romeo and Juliet*. Ed. G. Blakemore Evans. Cambridge: CUP, 2003.

Wordsworth, William. *William Wordsworth: The Major Works*. Ed. Stephen Gill. Oxford: OUP, 1984.

イギリス・ロマン派文学研究会編『イギリス・ロマンティシズムの光と影』音羽書房鶴見書店、2011年

サミュエル・テイラー・コウルリッジ『文学的自叙伝』東京コウルリッジ研究会訳、法政大学出版局、2013年

福原麟太郎、吉田正俊編『文学要語辞典』研究社、1978年

葉師川虹一『イギリス・ロマン派の研究』世界思想社、2000年